

『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注

——信仰宣言文に見える「御大切」という語彙についての覚え書き——

Tradução integral portuguesa do *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632)
da autoria do frade dominicano Frei Diego Colhado: Uma pequena observação
relativa à palavra japonesa «Gotaixet»

日 埜 博 司 (HINO Hiroshi)

キーワード

Amor と御大切, 仏教的な「愛」, キリスト教的な「愛」

大塚光信によれば、『懺悔録』の内容は下記のとおりである。

- 〔A〕 教義内容の宣言(原著4頁7行目から16頁8行目まで)
- 〔B〕 十誡および七大罪等に関する信徒の告解(原著16頁9行目から58頁26行目まで)
- 〔C〕 〔B〕に対する聴罪司祭の訓誡(原著58頁29行目から64頁13行目まで)

〔A〕を概観することにより、ヨーロッパ人宣教師たちが、カトリック教義のエッセンスを16～17世紀の日本人キリシタンへどのような日本語で説明しようとしたか、そのあらましを知ることができる。森羅万象の創造主であり唯一絶対の神であるデウス、デウスパテレ(聖父)・デウスヒリヨ(聖子)・スピリツサント(聖霊)の三位一体説、ゼズキリシト(イエズス・キリスト)の死と復活、最後の審判、モルタル科(大罪)とベニアル科(小罪)の違い、等々に関し、パードレが問い、弟子である日本人キリシタンが答える、という形式で論述が進められる。

訳注においてカトリック教義に関することを縷々ポルトガル語で述べても、ポルトガル人読者にはほとんど無意味であろうと思われるので、ここでは、日本語や日本の在来思想との関わりの中でカトリック宣教師の編み出したひとつの特異な訳語(欧語から日本語への)に焦点をあてる(その概要はポルトガル語で記した脚注にそのまま残した)。

イエズス会宣教師が世に送り出した、キリシタン教理書『ドチリイナ・キリシタン』等と同様、『コリヤード 懺悔録』にも Taixet (大切) という日本語が頻出する。尊敬の助辞を附して

Gotaixet(御大切)と表記されることが多い。この語彙は、肉欲的で官能的、かつふしだらな、というニュアンスを強く含む中世日本語の「愛」を「清らかな愛」「神の愛」から峻別するためキリシタンが常用したものであり、古く新村出による考察がある¹。

人間の愛を肉欲的で淫らなものとするキリシタンの宗教的立場を理解するため、まずは「恋」「恋ふる」「恋慕」という語彙を『日葡辞書』に就いて調べてみる。

Coi(恋). *Amor, ou saudades ruins*〔愛情, あるいは, 下劣な追慕の情〕. ¶ Coiuo suru(恋をする).

Ter amor, ou saudades lasciuas〔愛情, もしくは, 淫らな追慕の情を抱く〕(*Vocabulario*, f.55v).

Coi(恋ひ), Côru(恋ふる), Coita(恋ひた). *Amar sensualmente*〔肉欲的に愛する〕. ¶ Fitouo

coiteua, varui(人を恋ひては, 悪い). *Amar a alguém sensualmente he ruim cousa*〔誰かを肉

欲的に愛するのは下劣なことだ〕. ¶ *Item, Amar, ou ter saudades dalgum amigo, parente, &c*

〔あるいは, いずれかの友人や親戚等を愛する, それに対する思慕を抱く〕(*Vocabulario*, f.55v).

Renbo(恋慕). Coi xitô(恋ひ慕ふ). *Amor deshonesto, ou sensual*〔不実な, あるいは肉欲的な愛〕.

Vi, Fitouo renbo suru (人を恋慕する). *Amar a alguém sensualmente*〔誰かを肉欲的に愛する〕

(*Vocabulario*, f.208).

ちなみに 1592 年刊, ラテン文字版『ドチリイナ・キリシタン』には巻末に「ドチリイナのうち言葉によつての和らげ」という項目がある。そこではこの本に現われる重要な語彙が日本語の別の表現で言い換えられ, さらにポルトガル語の解説を施してある。Renbo の項を見ると, Renbo. Coi, xitô(恋慕. 恋ひ, 慕ふ)という日本語に加えて *Desejo sensual*〔肉欲的・官能的な欲望〕というポルトガル語の語釈が与えてある。注釈者の海老沢有道は「ポ語解は情欲的意味が強すぎるであろう」と記してこの語釈を批判しているが², 問題の語釈に関しては, 「和らげ」に見える判断が正しい。つまり海老沢はこの注釈を施さぬほうがよかった。

そのことは, 江戸期から明治初めにかけてさえ, 恋情＝恋が, 密通のよこしまな衝動, さ

¹ 「御大切といふ言葉——国語の史的観察」『新村出全集』第 11 巻(筑摩書房, 1971 年)所収。
「御大切という言葉——国語の史的観察」(新村出『新編 琅玕記』旺文社文庫, 1981 年)所収。
初出は, 旺文社文庫版によると, 1927〔昭和 2〕年 1 月 10 日「大阪時事新報」。なお同じ筆者の
「愛という言葉」(旺文社文庫版『新編 琅玕記』所収。初出は 1927〔昭和 2〕年 1 月 25 日「大谷大
学新聞」)というエッセイも参照。

² 海老沢有道他編『キリシタン教理書』(キリシタン文学双書, キリシタン研究第 30 輯)教文館,
1993 年, 170 頁, 頭注 8。

らには“劣情”同然の意味で用いられ続けていたことを歴史家の立場からみごとに引証する氏家幹人の考察により、明らかである³。

中世日本語における「愛」や「愛する」という言葉には、現代日本語においてそれらが有するのとは明らかに異なる意味が含まれていた。このことを興味溢れる筆致で教えてくれるのは、山口仲美のエッセイ『山口仲美の言葉の探検』(小学館、1997年)であるが、同じ問題を深く掘り下げているのが、宮地敦子の論考「愛と美に関する語彙の変遷」(同『身心語彙の史的研究』[明治書院、1979年]第二部)である。この精緻な研究の存在を教えてくれた水野恵子教授(日本語史)に深甚の謝意を表する。これに導かれてたとえば『今昔物語集』(訓読は岩波書店版「日本古典文学体系」本による。以下同じ)を参照してみると、嫉妬に狂った奥方が夫に向かい次のように言うくだりが見える。

「今夜正しく女ノ彼ノ許ニ行て、二人臥シテ愛シツル顔よ」(卷第三十一第十)

ここにおける「愛シ」は、男女がいちゃつく行為そのものを指す。撫でさすり戯れる行為、つまりは肉欲的な意味を持つ言葉であって、これでは今日の「愛」が帯びる精神的な意味合いはきわめて薄かったか、さもなくば皆無であったであろうことは容易に納得できる。

男が女を肉欲的に「愛」する場合に限らず、親が子を可愛がるに際しての「愛」も、否定的な意味で用いられていたことは、

「此ク獣ニ成ルニ、子ヲ愛シ^{カカシミ}悲シニ依テ、此ル身ヲモ受タル也」(卷第十九第三)

という例文からも、明らかとなる。前世で、子供を「愛し」た報いで、現世には獣の身で生まれてしまったというのだ。子供を分別もなく可愛がりすぎることは、仏罰を受けるほどの宜しからざる行為と見なされていたことが判る。この場合における「愛」は「相手に対する思いやりをもった『愛情』よりも、自分もしくは自分に属するものに対する主我的な『執着』による行動⁴」を指す。親が子を過度に愛することは、自己愛の延長であり、仏教的な観点からは、

³ 『不義密通——禁じられた恋の江戸』講談社選書メチエ、1996年、79～80頁参照。氏家は、明治の初め頃、恋という言葉は、なんと犯罪者の供述書の中で用いられていることを指摘する。氏家によると、たとえば、武蔵国足立郡某村の人妻銀^{ギン}が養子の甚太郎と姦通した一件の供述書の文中に、「私(=銀)ヨリ恋情申掛け卒ニ密通し、爾後互ニ恋慕止ミ難ク云々」(『司法省日誌』明治6年5月、埼玉裁判所同)と見えるし、また武蔵国榛沢郡某村の新八が、夫の留守中に隣家の人妻ソメに関係を迫った事件でも、新八の供述書に「不図恋情ヲ発シ相迫リシ所、有夫ノ身ニテ從ヒ難シト云フ、強テ押倒シ乗リ掛リシ所云々」(同上、明治7年3月、熊谷裁判所同)とある。

⁴ 宮地敦子『身心語彙の史的研究』162頁。

克服されるべき煩惱のひとつと認識されていたのであろう。

では『日葡辞書』では「愛する」はどのように定義されているのであろうか。「大切に思ふ」等と比較して以下に示す。

Aixi(愛し), Aisuru(愛する), Aixita(愛した). Itçucuximi(愛しみ・慈しみ), Itçucuximu(愛しむ・慈しむ). *Amimar, & mostrar sinaes damor*〔愛玩する, 愛情のしるしを示す〕. ¶ *Item, Estimar, & folgar com algũa cousa que lhe da gosto*〔あるいは, 自分に好感を与える何らかのものを大事にし, それを楽しむ〕. ¶ *Fanauo aisuru*〔花を愛する〕. *Folgar de ver as flores, ou fullas*〔花あるいは花^{かき}類を見て楽しむ〕(*Vocabulario*, f.6v).

Taixet(大切). *Amor*〔愛＝カトリック的な意味における愛。以下この項において用いる「愛」について同様〕. ¶ *Taixetni moyuru*〔大切に燃ゆる〕. *Arder em amor*〔愛に燃える〕. ¶ *Taixetuo tçucusu*〔大切に尽くす〕. *Amar sũmamente, ou mostrar grande amor, & agasalhado*〔至上の愛を示す, もしくは, 大いなる愛と包容力を示す〕. ¶ *Taixetni zonzuru. l, Taixetni vomô*〔大切に存ずる, あるいは, 大切に思ふ〕. *Amar*〔愛する〕(*Vocabulario*, f.299v).

『日葡辞書』における Aisuru(愛する)の語釈からは, 前掲 Cõru(恋ふる)とは異なり, 特に肉欲的に, 淫らに「愛する」というニュアンスを感じ取ることはできない。ただし「大切に思ふ」等とは違って, 「愛」の対象が精神性ないしは宗教性を帯びぬものに限定されている, という印象を受ける。

この私的印象を裏づけるかのように, 新村出も次のように記す。「愛は感覚的の意味を別にしても上より下に対していい, 目下や物件についていう場合が多いように見える。慈愛などもそうであるが要するに対等や尊上の用語ではなく, その内容に至っても, 倫理的宗教的観念は乏しかった。博愛とか清愛とか, また神聖というような意味は欠けておっらしい。いわゆるカワイガルの意味が最もきわだっていたのである。さればキリスト教のアモールすなわちラヴにあたる洋語を訳する場合に, 吉利支丹教徒は必ず当惑したにちがいない。当時の日本の俗語中からは, 愛という語では〔アモールの概念を〕表現し得なかった」⁵と。

それでは, キリスト教における amor(名詞)や amar(動詞)とは一体, どのような概念を有する言葉であるのか。

『新約聖書』「マタイ伝」の一節は「汝らの敵を愛し, 汝らを迫害する者たちのために祈

⁵ 「御大切という言葉——国語の史的観察」(旺文社文庫版『新編 琅玕記』所収)83頁。

れ」(Amai os vossos inimigos e orai pelos que vos perseguem)と説く(Mt 5, 44)。これに相当する一文を、ラテン文字(日本語)版、1592 年、天草刊『ドチリイナ・キリシタン』から探してみると、「生死の人と、また我に仇を為す者の為に、デウスを頼み奉る事」(Xôji no fito to, mata vare ni ata uo nasu mono no tameni, Deus uo tanomi tatematçuru coto)にゆき当たる。「マタイ伝」における「愛」は、平たい言葉で言い換えれば、相手を慈しみ、相手の身になって考えてやることを指すが、仏教ではしかし、これを「愛」とは呼ばない。「慈悲」という言葉がほぼそれに近い。

『日葡辞書』には *lifi* (慈悲) は *Misericordia, ou esmola* [慈悲, あるいは, 施し](f.141v) と定義されているが、仏教では、慈悲の「慈」は相手に楽を与えることで「与楽」, 「悲」は相手の苦しみを取り去ってやることで「抜苦」と呼ぶ。ふたつをあわせて「与楽抜苦」という表現が生まれるが、これがキリスト教における愛 *amor* (動詞形は *amar*) の概念に近いものであると思われる。

神学的な見地から *amor* の概念を満足に論ずることは訳者の手に負えないので、最近刊行されたキリスト教事典の定義をそのまま引き、試みに拙訳を附す。

O termo amor, na linguagem corrente, refere-se à tendência fundamental da pessoa que a impele para outro ser, percebido como «bem» e como «amável», e assim se refracta em todas as suas relações – consigo mesma, com a natureza, com os outros seres humanos e com Deus, articulando-se em muito diversas modalidades. Isto explica a pluralidade de significados que o termo amor pode assumir, de modo que pode ser utilizado para indicar o sentimento positivo, o apreço, atracção, o desejo, que se alimenta no encontro com um ser vivo, um objecto, uma arte, uma atitude. Outras línguas, como o grego, possuem termos diferentes para indicarem as suas diversas modalidades: *éros, filia, agápe*.⁶

Amor というタームは、現代語においては、駆り立てられ他の存在へ向かって突き進むうとする人間が基本的に具える性向のことであり、その場合の「他の存在」とは「善きもの」また「愛らしきもの」として認識されていなければならない。この言葉はだから、そうした条件を具える対象すべてに関して用いることができる。たとえば自分自身に対し、自然に対し、また、他の人間たちに対し、デウスに対し、いずれも使用可能であって、いた

⁶ *Christos: Enciclopédia do Cristianismo*. Prefácio de D. José da Cruz Policarpo, Cardeal-Patriarca de Lisboa, tradução de Miriam Godinho, O.C.S.O., Maria da Conceição e José Maria & Henrique Barrilano Ruas, Lisboa/São Paulo, Verbo, 2004, p.65.

って多様な様相の中で意味をなす語彙なのである。以上から導き出されるのは、amor という言葉が表現しうる意味の多義性である。つまり次のようなことを指し示すため amor は用いられるのである。すなわち、命ある存在、ある対象物、ある藝術作品、ある振舞いとの出逢いに際して湧いてくる積極的な感情、好意的評価、魅了されたという想い、上掲のものとともに関わりたいという欲望、である。他の諸言語、たとえばギリシア語には、amor の種々の様相を指し示すための異なったタームがいくつか存在する。たとえばエロス、フィリア、アガペのように。

うまく正しく訳せているかどうか心もとないのだが(辞書的に逐語訳しても日本語にならない)、ともかくもネガティブな価値を有する言葉でないことだけは確かなようだ。

他方、仏教でいう「愛」の概念とはどのようなものか。それを示すのにしばしば用いられるのが「渴愛」という言葉である。これは、たとえば熱砂の中で喉の渇きに襲われ、水を欲しがるときに感ずるような激しい欲望、ひいては満足することを知らぬ欲望を指す。再び『今昔物語集』を参照してみると、

「人ノ悪道ヲ不離ズ、六趣ニ輪廻スル事ハ、只、一塵ノ貯ヲ貪ボリ愛スル故也」(巻第五十五)

という例に端的に示されているように、仏教的見地からは、「愛」という名の食欲・執着こそすべての苦しみの根源とされた。仏教がこのような「愛」を厭うべきものとするもうひとつの理由は、それが「憎悪」と表裏一体であって、前者は後者へいとも容易に転化しうると認識されたからであろう。

『日葡辞書』には前掲「渴愛」という語彙は載録されていないが、「渴愛」に近い意味を有すると思われる語彙なら幾つか拾うことができる。それらに共通するのは、何事かに抱く過剰な愛着や執着、という定義づけである(下記に列挙する『日葡辞書』所載の「愛着」「愛執」「愛欲」「着心」「執着」「執」「執心」という語彙には、いずれにもBuppóの言葉である旨の注記は附されていない。しかし『角川古語辞典』や、宮坂有勝『暮らしのなかの仏教語小辞典』(ちくま学芸文庫、1995年)によると、「愛着」「愛執」「愛欲」は仏教において特別な意味を有する語彙である)。

Aigiacu. i. Aixitçucu(愛着、すなわち、愛し着く). *O ter afeição, ou amor intenso* [愛着を持つこと、あるいは、強烈な愛情]⁷.

Aixũ. i. Fucaqu aigiacu suru(愛執、すなわち、深く愛着する). *O ter afeição intensa, &*

⁷ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.5v.

desordenada [強烈にして常軌を逸した愛着を持つこと]⁸。

Aiyocu (愛欲). *Grande desejo, ou afeição dalgũa cousa* [何事(何物)かに対する大いなる欲望, あるいは愛着]⁹。

Giacuxin (着心). *Coração afeiçãoado, ou afeição grãde de algũa cousa* [愛着に囚われた心, もしくは何事(何物)かに対し大いに愛着・執着を抱くこと]¹⁰。

Xû (執). *Vt, Xûxin (執心). Xûgiacu (執着). Afeição, & amor dalgũa cousa* [何事(物)かに対する愛着, 愛情]. *S* [文書語]¹¹。

Xûgiacu (執着). *Afeição dalgũa cousa* [何事(物)かに対する愛着・執着]. *Mononi xûgiacu suru* (物に執着する). *Afeiçãoarse a algũa cousa* [何事(物)かに対して愛着を抱く]¹²。

ついでながら, 何事か抱く過剰な愛着や執着を捨て去ることを「無我」と呼び, 「諸法無我」とは「諸行無常」と並ぶ仏教思想の重要な柱である。その「無我」がなにゆえにプラス評価につながるのか, ヨーロッパ=カトリックの思想的観点からはいぶかしく思われたのであろう, ポルトガル語による語釈が附された『日葡辞書』には「無我」——ただし *Buppô* 語である旨の注記はない——の語釈として次のような文言が見える。

Mugana (無我な). *Vt, Mugana fito (無我な人). Homem de pouco brio, ou espiritos, ou que não se lhe dà das cousas* [自尊心もしくは気力がほとんどなく, あるいは, 物事に対する執着心のない人]¹³。

仏教的視点からはポジティブな, というよりも根元的な価値を有するはずの「無我な(人)」という言葉に対し, 明らかにネガティブと解釈しうる説明しか与えられていないことに興味を惹かれる。『日葡辞書』がキリシタンの編纂物である以上, 語彙的な考察にまでキリシタンの——もしくは西欧的な——価値観が微妙に影響を与えているということか。

上述のことに多少関連すると思われるので, 『日葡辞書』に載録される *Goacuxu* (五悪趣)

⁸ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.7.

⁹ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.7.

¹⁰ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.124v.

¹¹ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.397v.

¹² *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.314.

¹³ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.170.

という言葉の語釈に触れておく(この語釈に現われる *Giacu* という語彙には別途言及する)。

Goacuxu は次のとおり定義される。

Goacuxu (五悪趣). *Cinco estados de gente, ou infernos que poem os lapões. Conuem a saber:*

Giacu, Gaqi, Chicuxõ, Xura, Ninden [日本人の考える人間の五つの状態、もしくはもろもろの地獄、すなわち「着」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人天」である]¹⁴。

これは言うまでもなく、仏教における「五道」ないしは「六道」のことを指している。「五道」は地獄界(道)・餓鬼界(道)・畜生界(道)・人界(道)・天界(道)を指し、以上の五つに(阿)修羅界(道)が加わると「六道」となる。地獄・餓鬼・畜生の三世界は、輪廻する世界としては最も厭うべきものと考えられているので、「三悪道」あるいは「三悪趣」と呼ばれる。「六道」の場合、これに(阿)修羅界(道)が加わって「四悪道」あるいは「四悪趣」となる。「三悪趣」でもなく「四悪趣」でもなく、『日葡辞書』が載録しているのは「五悪趣」である。『日葡辞書』が *Ninden* と表記しているのは「人天」であり、天界(道)・人界(道)を併記したものにほかならない。

人界にせよ天界にせよ、「悪趣」には属さぬものの、仏教思想にあつては、他の三道ないし四道に比べれば、多少“まし”なだけの、解脱やら悟りやらには程遠い、本質的には苦に充ちた世界である。

『往生要集』には、人界に生きる人間が、内実いかに穢く不浄の存在であるか、が繰り返して強調されている。いわく、どのように上等のものを食べても、体内で一夜経てば不浄となる。その糞の臭いのように、若いも若きも、いかに美しく飾ろうとも、人の身体は不浄である。まして死後、墓地に捨てられて七日も経てば、その体は脹れあがり、野獣に食われ蛆が群がり、ついには白骨となり、歳月を経て土に還る。人間の体は、始めから終わりまで不浄だということが判るであろう。愛し合う男女も、皆このように不浄なのだ。これを知ったなら、たれか愛著の心を生じようか、と¹⁵。『九相詩絵巻』(国宝、個人蔵)には、妙齡で逝った婦人の肉体が、死後、種々の段階を経、どのような変化を遂げてゆくのか、が鮮やかな彩色と怖

¹⁴ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.353v.

¹⁵ 速水侑『地獄と極楽——『往生要集』と貴族社会』吉川弘文館、歴史文化ライブラリー51、1998年、61～62頁。源信『往生要集(上)』石田瑞麿訳注、岩波文庫、1992年、60～62頁参照。

ろしいまでのリアリズムをもって描写されている¹⁶。

天界でさえ、そこは他の五道もしくは四道に比べれば、確かに楽しみ多く苦しみ少ない世界ではあるけれど、あくまでも輪廻世界のひとつにすぎず、したがってそこに生を享けた者は死を免れない。しかもその死に際しては、他の輪廻世界に生まれた者に比べ、むしろはるかに多くの苦しみを味わわねばならぬという。

つまり「五悪趣」という語彙そのものの正否はさておき、人界・天界を *Ninden* (人天) と一括し、他の四道と同様、これを苦しみに満ちた世界と考えて「五悪趣」という語彙を載録した『日葡辞書』編者の仏教理解は、本質的なところで、少しも誤ってはいない。

さらに *Goacuxu* の語釈に見える *Giacu* という語釈に少々拘泥して言及する。『邦訳 日葡辞書』編訳者が注記するとおり、これは確かに *Gigocu* (地獄) の誤植か誤記かに違いあるまい¹⁷。「五道」にせよ「六道」にせよ、そのうちには地獄界(道)が必ず含まれるからである。ただこれを *Giacu* (着・著) のまま据え置くとしても、何事かに対する過剰な愛着やら執着やらを厭わしいもの^{いと}と考える仏教的価値観に照らせば、まるで突拍子もなく的外れな解釈であるとは評し得ないはずである。そこで『日葡辞書』の *Giacu* の項を掲げる。

Giacu (着). *Vt*, *Giacusuru* (着する). *Estar afeiçoado demasiadamente a alguma cousa* [何事(物)かに過剰な愛着・執着を抱いていること]¹⁸.

所与の語釈に一目瞭然であるとおり、少なくとも『日葡辞書』編者にとって、*Giacu* は上掲 *Aigiacu* (愛着) なり *Aixu* (愛執) などの類義語と映ったに違いあるまい。『日葡辞書』の編者がここで *Goacuxu* に語釈を施すに際し *Giacu* という語彙を“わざと”採用したとしても、それはそれなりに、キリシタン側からの仏教理解をさりげなく反映している、と考えては恣意的に過ぎるであろうか。どちらにせよ、この語釈における *Giacu* は、結論として *Gigocu* の誤りではあっても、上述のとおり、*Giacu* は仏教の忌み嫌う「愛」に通ずる言葉であり、*Goacuxu* の語釈の一部として、全面的に荒唐無稽なものではない、ということだけは指摘できると思う。

キリシタン時代のカトリック宣教師は、ひとつには、中世日本語の「愛」——あるいはその

¹⁶ 小松茂美編『日本の絵巻 7 餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』中央公論社、1987年、110～119 頁参照。

¹⁷ 『邦訳 日葡辞書』土井忠生/森田武/長南実編訳、岩波書店、1980 年、303 頁。

¹⁸ *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.124v.

類語としての「恋」——という語彙にときおり抜きがたく纏わりついているネガティブな概念(好色, 淫ら, 等)を熟知したうえで, いまひとつには, 在来仏教思想における「愛」がキリスト教における amor とはまったく相容れぬ意味を有していることに気づいたうえで, 信徒たちが「神の愛」をめぐる致命的かつ本質的な誤解を犯すことのないよう, amor の訳語として「愛」を放棄し, 代わって「(御) 大切」を採用したのである。

末筆ながら, いつものように中世日本語・中世日本文学に関する懇切な御指導を賜った水野恵子と和田律子の両先生に対し, 深甚の謝意を表する。